

# 金属の冷たさ

文風 冴月

草を食む日時計が、草原の中に一人。回り込む横顔に蝶の模様を見る。雲のない空に一機の土管が浮遊している。何もない水溜りに浮かぶ城の中で、舞踏会が開かれている。暗い雰囲気の中で踊るのは腐った鎧の騎士達だ。街灯に照らされた王様がふんと一声鳴いて、空に虹がかかる。私にはそれがこの世のものとも思えずつい苦笑をしてしまう。溶けるように消えたキャンバスに置き忘れた手紙の一行が、今も耳の中に残っている。ひっそりとせりあがる芋虫の小指に嵌めた金属の冷たさを僕は今も覚えている。

煙の中から現われた金色の獅子が、何事か呟いてまた消える。緑の煙突から吐き出される祖父の遺影。立ち上る恐怖。振り下ろされる碇と猫の鳴き声に私はついに懐かしくなる。夕暮れを待つ蜘蛛に、蜻蛉が飛んでいく。鋼鉄の身体の灯火に移る写真機と珈琲のぬくもりだけを残して。

金属の冷たさ。夜の霧の中で見るのは青白い橙。そこに聳える塔のてっぺんから王女様が手にしたフクロウを飛び立たせる。世界の端っこで歌う花びらみたいな小鳥がちょっとだけ飛んでいく。合わせて黒いマントを干上がらせて。煙突の上から見えない砂漠地帯。鏡の上を滑る境界線。水力発電のヨットを内緒で開拓した子どもの遊びに付き合う。さらさらと流れる月の上に輝く鎖のお菓子。くらげの餌を泡の中に詰め込んで、浮かんでは消える。そこにはただ音がひとつ落ちているだけで、今はもう何もいない。煌びやかな魔法使いが魂を捧げる。迷子になった迷路の壁紙をひどく忙しなく取り替えるロープの老人が掃き掃除をしている。光輝く世界に羽ばたく蝶々の起こす風。降りしきる明後日に眼に映すのは銀色の頬。

中でもとっておきなのは、マイクに照らされた棺。黒いボックスにはステージの様子が思い浮かぶ。誰もいない円形闘技場。暮れなずむ砂漠の息とライオンの喉が綺麗に並んでいる。刀の先に踊るピエロの一滴がこの詩の行方を思って泣いている。

そこを支配している王様が言うには、深く椅子に座った森の中で鳴り響く鐘として。私は風の中に立ってその放送を聴き続けている。叩いたドアの向こう側には暖炉が一人立っていて、臆することなく溜息をついた。白く吐き出される煙に私たちのなれのはての未来を紡ぐ。見透かされた煙の中で本当に見失ったものはあの日くれた歌詞。そこではないどこかに立ち尽くす灯台の踵。触れない遥かの壁に描かれた蛇の絵。ゆっくりと歪曲して飲み込めない小ささになる。とても悲しい。ああ。なにもない。青い、色を塗りつけている。色紙に書き込まれた細かな文字達が、ハローと叫んでいる。どこかから呼ばれる。黒く閉ざされた扉の奥からケルベロスが覗く。みっともない赤い瞳の奥底に眠るバスタブから今日も壊れた周波数。

棘のある花に谷間から覗く太陽が調べを乗せて。何から何までひどく吸い取られるような可能性に私は恐怖を滲ませる。川上からやってきた一艘の化石の群れ。中には羊の吐息に隠された秘密。割ってみて初めて分かる寒々しい鋼鉄の足跡。そこを掘ることによって草木は枯れていく。火星に笑う少女を見て、私たちはカップをかちんと合わせる。ワインから流れるは科学的な味覚。試しに割ってみたメガネの縁から溢れ出す緑の湾曲。崖に腰掛けて踊る木々に降り注ぐ羽毛。鼻持ちならないコイルに冷却の余地は残されていない。世俗の果てに残された新聞紙。そこに書かれた色とりどりの風景に良いが醒めてしまう。香りの良い湯気が今はない小石に思いを馳せる。見たことのない星々に揺られて垣間見た彼の世は、今日も何処かで市場を開いている。

カーテン越しに覗く切り取り線。窓辺に移ったのは花瓶の中で笑う恋心。闇が迫る太陽の街角で、私たちの小魚が喉から遊び出している紙面。垂直成分とカカシの間で揺れているのは訳がある。歩道橋を渡る風船地帯。ひっくり返したその先に待ち受けているのは全ての儂い憂い。仕舞い込んだ箱には漏れなく繋がれた犬たちの道化となる。加持祈祷となったなら怖いものは斧を振り下ろす巨人の腹筋。海月だけの世界に飛び出してしまうと、あとはカラスになって世を明かすだけ。それさえ出来れば本棚から並びとおしている私たちの仲間入り。電車の窓から投げ捨てたビルの障壁。餅を食べながら飲み込んだ月夜にかかる一瞬の星。

長きに渡って行われた星の霧たちに挨拶をして、遠くの宇宙で想いを届ける。電波に乗っているのは他でもない冷凍庫だけ。賑やかな甲冑で呼び起こされた噴水に腰掛けて読み耽るある日の群青教会。帆先に立った会長と一緒にあって看板整理を施して回る。土曜日のリズムを程なくして打ち明ける氷の腕。側溝を我が物顔で優雅に踊りつけて夕日の通るのを密かに見守った栗鼠たち。でっち上げの鏡において向かうのは私の横顔ではない。腕の生えた重しがひとつ、急な坂道を転がり落ちている。ごろごろと回る風車に思い出される邂逅。鬚の生えた亡者が朽ちた木の中で眠ろうと足を広げていた。

星の欠片を拭い去り、新たに見えたのは仄かに香る少女の笑い声。風の中にたゆたうピアノの滅びに似て。犬達の同胞もここにはもういない。水溜りに沸いた風のない舟の旅立ちを斡旋する。記号をもってここにおいて。白線を引くことによって我らの境界線を侮れなくする。書物を燃やす。接近戦略を白い国へと運ぶのは本屋のやることではないけれど、金属を長い棒に変形させてしまえば夕日の中でムニエルを貪るだけはできる。一匹のマウスを取り合いしていた絵画は、褪せた色を切なく見上げるばかりで。俯いたドアを叩くことで忘れ去られた煤が飲み込まれる。微生物達の中、笑い転げるのは推奨の砂時計に似た溶解液。水色に染まる水平線には跡形もなく旋律が蘇っていく。切なく広がる波紋には鹿の模様が施され、笛の穴には密林が泣き真似ばかりしているのだった。影をはさみで綺麗に切り取ることで広がるのは夕食の良い匂い。私の耳たぶから溢れ出るのは線と線とを繋いだ何もない心。ペンの先で紡ぎ出す愛情の線路。そこをこそばゆい感情で退ける一羽の向日葵が空を駆ける。中では兎が舞い踊り、舞踊を疲労する電線達が見上げる先広がるのは果てしない電子掲示板である。涙が壊れた音を聴いた。

石灰色に冷えた銀時計の太枠を、何かで埋めるのは貴方の使命。夜が落ちたらカモメの鳴き声の陽だまりで、影踏みをしているトキの声。長いススキの森を抜けた水の音を滴らせてお椀の中に閉じこもる体育座り。首の伸びた雲をかき分けて、白い世界から手を伸ばす。線を引くために必要なのは黒い濃淡だけで済む。廊下のつき当たりに輝くその色は、虹を模したテニスコートの鏡。整頓された真っ赤な色切り。折り紙の中で歌う。その時に星を輝かせるのは雨が落ちるのに任せて、着席していた机に何を乗せるのか理解できないのは幻の森に映された矢印を用いて、渡すのは血の色だけが臭う。窓ガラスの奥底にひっそりとひたむきな世界。軋む。流れだけで大きく膨らむのは色鉛筆の碎ける音。



雨音の巡る樹木の上で一人佇む世界色に満ちた一片の街。夕日を模した銀環日食を踏まえた上で湧き出てくるのは一条の停止線。うたうのを諦めた色とりどりの山茶花がコンセントを突き抜けた先の夢を色褪せて握り締めた倉庫の現状。宝石箱に担ぎ込まれた大音声の古びた屋敷。跡地に残された砂の入った小壺。クロールで進化した海洋人類の栄光を見るのはテレスコープのテレズマのみ光を照らし出して紛う。折れ出ている先のトンビの滑空を調べに乘せてひとつの鍵盤ハーモニカのゆとりを遊ばせる。ただただ進み続けるオーガナイズの中にひっそりと線路は伸びていて、不敵に笑い転げるピエロのナイフを片時も放すことのなきよう。指名手配に突き立てたダーツの息吹を聴いたなら、芽が出る春の融雪。迷い込んだ橙色の通りにうっすらと忍び寄る七色の影。幻覚を感じ取ったある朝の憂いはそのままにして喉元に車を嵌める。断頭台の気持ちが解るようになったら、旅の支度が始まる。